



Osaka Gakuin University Repository

Title	日露戦争と長崎における木材業の展開 Development of Lumber Industry in Nagasaki at the Russo-Japanese War Period
Author(s)	松村 隆 (MATSUMURA TAKASHI)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 21 巻第 1 号 : 21-36
Issue Date	2010.06.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

日露戦争と長崎における木材業の展開

松 村 隆

Development of Lumber Industry in Nagasaki at the Russo-Japanese War Period

MATSUMURA TAKASHI

ABSTRACT

In this paper, the trend of the lumber industry in Nagasaki of the Russo-Japanese War period is considered. A Chinese merchant in Nagasaki was exporting wood to Shanghai before. Export to a Chinese northern part began taking the opportunity of Russo-Japanese War in addition to this.

Wood arrived from the West Japan Sea of Japan coast region, Kyushu, and Akita, etc. to the lumbering industry person in Nagasaki. The processing to the board was done at the point of production. The size of the board was put together on the standard of China. Therefore, it can be said that the lumbering industry person in Nagasaki gave the home information on the consuming region. The China export of wood had been approved by the division of labor between economic subjects. Moreover, suitable wood for shipbuilding was imported from the foreign country.

はじめに

本稿では、日露戦争と長崎の木材業について論じる。これまで明らかにしたように¹⁾、日露戦争を契機として、日本人の中国、韓国への居住が増えた。それにともない、在外邦人向けの住宅用資材として、日本からの木材輸出も増加した。輸出をおこなった諸都市は、西日本の主要都市が中心であったが、長崎の場合はどのような展開があったであろうか。

1. 木材輸出と長崎木材業

長崎の木材業については、木材輸出量は多くはなかったが、輸出先は主として上海であり、長崎に居留する清商が貿易を取り扱っていた²⁾。日露戦後の時期にいたって、日本産の木材価格が漸次高騰したため、上海を中心とした南清への木材輸出は収支がとれなくなり、この方面への輸出額は減少傾向をみせていた。しかし日露戦争以来、他の地域と同じく、長崎においても満韓地方への輸出が増加した。このため、全体としての輸出総額は増加した³⁾。長崎市における木材、板の輸出入についてみたものが、表1である。輸出額は順調に増加していったことがみてとれる（輸入については、後述する）。

外国向けの材種についてみよう。上海方面については、松1寸板（長さ7尺5寸、次いで長さ6尺5寸のもの）が主であった。杉6分板、4分半板（5分板ともいう）、樅4分板がこれにつづいた。満韓地方については、「閩門両港と略同類なり」とされる⁴⁾。板の造材法については、「板の清国

- 1) 拙稿「日露戦争期における下関・門司木材業の展開」（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第1号、2009年）同「日露戦争と大阪木材市場」（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、2009年）を参照。
- 2) 『東京外十一市場木材商況調査書』（農商務省山林局、1906年、以下『木材商況』と記す）p12
- 3) 輸出額の動向については、『木材商況』p125
- 4) 輸出材種については、『木材商況』p125および前掲拙稿

表1 長崎市における木材・板の輸出入高(円)

	輸出	輸入
明治31年	81,889	3,226
32	48,391	89,354
33	63,084	170,283
34	73,762	200,374
35	56,242	104,068
36	85,834	143,766
37	151,629	93,576
38	191,336	175,218

出典：『木材商況』 pp126-127.

表2 長崎市における輸出向け板相場(円)

材種	明治38年1月	6月	明治39年1月	2月
隠岐長6尺5寸	80	75	-	-
対州松1寸板長7尺5寸	112	116	122	122
石見松1寸板長7尺5寸	112	116	122	122
石見松1寸板長6尺5寸	92	95	100	105
長州松1寸板長7尺5寸	112	116	122	122
隠岐松1寸板長6尺5寸	95	97	101	106

出典：『木材商況』 pp333-334

輸出向は、長さ7尺5寸を主とし、6尺5寸のものありて、当地方特有のものとして可なり。これ同国は8尺単位なるより可成、その長きを好むを以てなり」⁵⁾とあるように、中国における住宅の規格から要請される寸法を意識したものであった。これに対して、満韓地方への輸出品は、日本人の在外居留用住宅建材であった。満韓地方の具体的な都市名としては、釜山、仁川、元山、鎮南浦、營口、群山、芝罘、濟州島、京城、牛莊、木浦、牛家屯、大連、浦藍等であった。これらの地域へ「輸出するに至れり、これ日露戦争の影響によるものなり」とされる⁶⁾。

輸出の季節は、春季から初冬までが多かった⁷⁾。これは、輸出先の事情

5) 『木材商況』 p383

6) 満韓地方への輸出については、『木材商況』 p128

7) 『木材商況』 p128

によるとみられる。また輸出には、汽船を用いたが、これは、日本の他の輸出港と同様であった⁸⁾。

長崎市における輸出向け板相場についてみたものが、表2である。材種については、西日本の日本海地域が産地であること、長さ7尺5寸の板と6尺5寸の板とがあり、前者の価格は後者より、2割程度高いことがわかる。価格変化については、明治38年1月からの約1年間で、1割程度の価格上昇があった。なお輸出向松並板は、長さ7尺5寸、厚さ1寸のものは5枚半をもって、長さ6尺5寸のものは6枚をもって建値とした。幅の狭い材は減価された⁹⁾。

2. 木材調達と長崎木材業

長崎木材業者は、どのような地域から木材を調達したであろうか。本章では、木材調達に関わる問題を考察する。取引の形態については、第4章で考察したい。

当該期における長崎の内国産、外国産の木材輸入についてみたものが、それぞれ表3、表4である。内国産材輸入については、松板を主として、板類の輸入が多い。長崎では木材の加工を他地域にも依存していたことが

表3 長崎市における内国産木材輸入高(明治38年)

材種	数量	金額
松板(主として輸出向)	約80,000間	80,000円
その他板	約100,000間	70,000円
松角	約15,000尺メ	60,000円
杉中小角	約20,000尺メ	60,000円
杉大角	約2,000尺メ	10,000円
その他	-	20,000円
合計	-	300,000円

出典：『木材商況』p126。なお原史料では「松角」は60萬圓とされているがこれは6萬圓の誤りと考えられるため、訂正した。

8) 『木材商況』p128

9) 建値と減価については、『木材商況』p334

表4 長崎市における外国産木材輸入高(円)

	明治37年	38年
オレゴンパイン床及甲板用	26,791	24,343
オレゴンパイン丸及角材	7,590	2,414
柴檀	256	-
チーク材	50,460	128,242
その他	8,479	20,219
合計	93,576	175,218

出典：『木材商況』 p127.

知られる。外国産材輸入については、オレゴンパイン床及甲板用、チーク材が多い。こうした材は、造船所用であった¹⁰⁾。

木材の産地についてみると¹¹⁾、杉については、秋田・能代、日向、豊後が主たる産地であった。秋田・能代については、板類が最も多く、特に6分板が最も多く、4分板がこれに次いだ。これらは寸法から判断して、輸出用ではない。8分1寸板も入荷したが、これは輸出用であろう¹²⁾。日向については、飢肥、福島より入荷した。8分板が多く、輸出用であったとみられる。4分板、6分板は入荷は少なかった。高級品は大阪へ送られたため、長崎へは入荷しなかった。豊後については、筑後の若津より6分板が多く入荷した。松については、石見産、隠岐産が最も多かった。石見産材は強津から出荷された。隠岐産材は、船主が買入れて輸送したものであった。これらの産地に次いで、出雲、萩・須佐といった長州、肥後が松材の産地であった。松材は、中国輸出用の板として、首位をしめるものであるが、産地の原料が徐々に減少の傾向をみせ、杉が代用されつつあった。樅は肥後、隠岐等から入荷したが、少量であった。外国産材の産地は、北米や南部暹羅であった¹³⁾。こうした木材の相場についてみたものが、表5である。

以上のように、長崎木材業の材調達先は、秋田・能代や西日本の日本海

10) 『木材商況』 p126

11) 『木材商況』 pp369-370

12) 輸出用と判断した根拠は、『木材商況』 p383

13) 外国産材の産地については、『木材商況』 p128

表5 長崎木材相場(円)

材種	寸法	明治38年1月	6月	明治39年1月	2月
隠岐樅	正1寸	130	130	130	130
隠岐杉	正1寸	160	180	180	180
能代杉	正8分	130	130	180	180
肥後杉	7分	91	105	110	110
日向杉	8分	96	112	116	116
佐渡杉	6分	75	85	80	85
肥後杉	6分	80	85	85	90
隠岐杉	改良6分	60	70	70	75
能代杉	6分	85	95	88	90
佐渡杉	4分	62	70	72	72
豊後杉	6分	83	88	85	90
肥後樅	台小切1寸	140	180	180	180
秋田杉	6分	85	95	89	90
肥後樅	改良4分	66	80	80	80
能代杉	4分	72	81	76	77
肥後樅	並4分	50	65	60	61
秋田杉	4分	72	81	76	77
肥後樅	改良6分	72	90	66	90
肥後樅	並6分	-	80	75	75
能代杉	挽角上	115	125	125	125
肥後杉	大角	128	138	138	135
能代杉	大角	128	138	138	135
秋田杉	中角	85	100	100	100
紀州杉	中角	85	90	90	100
秋田杉	小角	75	75	75	77
紀州杉	小角	75	75	75	77
隠岐杉	改良小角	75	75	75	75
豊後杉	改良小角	65	72	72	72
蘆北杉	小角	60	60	60	60
肥後挽角	本口上	110	120	120	120
蘆北挽角		70	70	80	80
飫肥弁甲		130	150	150	150
能代寸甫	大	1.5	1.7	2	2
米国松	角立方呎	0.83	0.83	0.8	0.8

出典：『木材商況』 pp330-332。

価格は毎月中旬の相場である。板は100間建、木材は2500才建、弁甲は5尋建。杉板建値は尺以上とし、以下9寸は3円落、8寸は6円落。

地域、九州が中心であった。

輸入の季節は¹⁴⁾、外国産は夏季に多く冬季に少なかった。内国産も冬季には少なく、秋田や隠岐からは入荷は全く途絶えた。木材の運搬についてみると¹⁵⁾、各産地から長崎港へ輸送する際には和船を用い、板は10枚程度を藁縄で括っていた。鉄道は運賃が高額であるため、急用の場合のみ用いられた。

以上要約すると、長崎の木材業者は、輸出用の松材を西日本各産地より集荷して中国等へ輸出した。北米等から造船用の木材を調達した。秋田・能代も重要な産地であったが、輸出用木材の主たる調達先ではなかったということである。

3. 木材業者と同業組合

当該期長崎における木材業については、「当地は木材市場として観るべきものなく、ただ市中に散在せる商売がその取扱を為すなり」とあるように¹⁶⁾、それほど盛んであったわけではなかった。長崎の木材商¹⁷⁾は、問屋と材木商の2種に別けられていた。問屋は、貿易商が木材業を兼業するこ

表6 明治38年 長崎市貿易商(材木取扱問屋)

徳島徳造	浦五島町	秋田材取扱
磯部保蔵	本五島町	豊後材取扱
磯部元蔵	本五島町	豊後材取扱
江川源治	本五島町	雑
大串喜助	本五島町	秋田材取扱
中島榮三	西浜町	日向材取扱
大津礼八郎	西浜町	日向材取扱

出典：『木材商況』 pp209-210。

彼らは有力なものであり、他に草村、富山、田中等もいた。

14) 『木材商況』 p128

15) 『木材商況』 p128

16) 『木材商況』 p13

17) 『木材商況』 p209

表7 明治31年長崎市貿易商

		兼業他
石塚甚藏	船大工町	鋸釘販売、荷受問屋、川口屋
磯部保藏	本五島町	物品委託問屋
伊藤甚吉	樺島町	酒類其他委託問屋
伊藤竹三郎	江戸町	船具商
岩崎仁三郎	本籠町	荷受問屋
林熊八郎	西浜町	物品委託問屋
西谷倉松	築町	
友永鹿三	船大工町	荷受問屋
徳島徳藏	浦五島町	物品委託問屋
富山幸助	浦五島町	物品委託問屋
大津礼八郎	西浜町	委託販売・荷受問屋
大串喜助	浦五島町	物品委託問屋
片峯七郎	船大工町	薬種商、泉屋
蒲地廣太郎	材木町	医療器・洋酒商、立見屋
川原伊右衛門	築町	物品委託問屋、酒類卸商
河添甚平	江戸町	硝子卸兼建築用金物商、川野屋
川添良平	江戸町	硝子卸兼建築用金物商、川野屋
米村儀八	江戸町	荷受問屋、汽船回漕業
田中吉太郎	銅座町	請品委託問屋
武未坂次郎	銅座町	物品委託問屋
田中金兵衛	西浜町	米穀委託問屋
永野彌四郎	江戸町	荷受問屋、鑼詰製造
中尾嘉四郎	築町	荷受問屋、麻亭荒物商
中川儀平	銅座町	物品委託問屋
白杵伊平	萬屋町	海産物委託問屋
野村新次郎	築町	野村屋
山口吉平	築町	米穀・酒商、大島屋
山本房吉	材木町	海産物商
山口茂一郎	西浜町	委託問屋、砂糖商
山口官治	萬屋町	荷受問屋、米穀販売
柳仁平	浦五島町	
山村清造	築町	油商
松本武助	平戸町	綿花肥料取引、穀物商
松尾巳代治	恵比須町	綿花肥料取引、穀物商
榊屋喜平次	築町	
松永嘉四郎	萬歳町	
松本庫治	江戸町	荷受問屋、石油卸商、松庫商店
松延重吉	西浜町	物品委託問屋

藤野豊太郎	萬歳町	輸入品売買仲買業
舟本萬次郎	本籠町	荷受問屋、茶・椎茸・肥料商
藤瀬理三郎	築町	石油・唐綿・種油商
肥塚常助	樺島町	倉庫業
江崎左右平	築町	物品委託問屋
江島彦太郎	銅座町	荷受問屋、諸鐘詰製造
菊池喜三郎	樺島町	諸物品委託問屋
宮田萬蔵	東浜町	砂糖・石油取引委託問屋
三島治郎	樺島町	煙草卸問屋
溝田文吉	本紺屋町	茶卸商
三浦清三郎	東浜町	
宮川忠三郎	榎津町	物品委託問屋
城後定吉	紺屋町	物品委託問屋
城島勝助	江戸町	荷受問屋、川原屋
志賀長三郎	江戸町	板硝子・金物卸商
渋谷隆七	築町	荷受問屋、海産物商、大和屋
平松梅之丞	樺島町	輸出品売買、松尾屋
平田犀助	浪平町	石炭販売商、播磨屋
盛藤吉	梅崎町	荷受問屋
守鞆孫石衛門	浦五島町	石炭商
鈴田清次郎	五島町	薬品・医用器械・洋酒・売薬商

出典：『日本全国商工人名録』（1898年）（渋谷隆一編『明治期日本全国資産家・地主資料集成Ⅱ』 pp108-109.1984年、柏書房）

とが通常であり、下関等と同様であった。長崎では、問屋は荷受問屋と称した。材木取扱問屋は、自分の取扱う木材の産地、材種を定めていた。明治38年における長崎市の材木取扱問屋についてみたものが、表6である。彼らは有力な貿易商であり、日露戦争期に、木材の満韓輸出が盛んとなる以前から、営業するものが多かった。そのことをみるために、表7をみよう。浦五島町の徳島徳造は物品委託問屋として、本五島町の磯部保蔵は物品委託問屋として、浦五島町の大串喜助は物品委託問屋として、西浜町の大津礼八郎は委託販売・荷受問屋として、明治31年から営業していたことがわかる。

材木商¹⁸⁾は、特に小売の木材販売を専業とするものである。明治38年当

18) 『木材商況』 p210

時、その人員は少なくはなかった。なかでも有力な材木商として、表8に掲げた者がいた。彼らのうち、池邊、今道、岡本、白石については、明治31年長崎市材木商をみた表9に同姓のものがある。林與助、松岡善吉は、明治31年から営業をおこなっていたとみられる。

問屋と材木商の社会的関係については¹⁹⁾、「当地もまた、問屋に対して材木商の勢力侮り難きの風ありて、過般来木材請引に関し両者間に紛議ありしが、問屋の多少譲歩に依り、その規約を改正して漸く落着するに至れり」とある。材木商に有利な木材の計測法が、規約の改正によって採用されたものとみられる。

上海へ木材を輸出したのは²⁰⁾、長崎市居留の清商であった。彼らは内地より注文を受けて木材を買入れ、それを輸送した。上述のように、上海貿易は停滞の道をたどっており、以前は数名いた輸出業者は、明治38年には、源泰1名となっていた。その金額は、70,920円であった。その他、裕和盛は營口へ2,187円、芝罘へ190円、また昇昌裕は芝罘へ234円の輸出をおこなった（いずれも明治38年）。

木材業者の組合については²¹⁾、問屋は一般貿易品を取扱ったため、貿易

表8 明治38年長崎市材木商(小売業)

青木亀次郎
池邊松雄
今道秀太郎
勝野虎吉
松岡善吉
岡本文次郎
杉原磯吉
白石善太郎
林與助
小松藤平

出典：『木材商況』 pp210-211。

彼らは有力な小売業者であり、他多数の業者がいた。

19) 『木材商況』 pp211-213

20) 『木材商況』 p213

21) 『木材商況』 p209

表9 明治31年長崎市材木商

			所得税	営業税	
○	池邊十六	材木町	16円58銭	49円56銭5厘	兼米穀商
	今道双五郎	銅座町	16円	3円83銭	
○	林與助	浦五島町	10円7銭	4円2銭	
	友永榮三	船大工町	24円67銭4厘	20円35銭5厘	
	岡本安次郎	酒屋町	16円57銭4厘	3円18銭	
	薄井善吉	本籠町	10円32銭	3円9銭	
	野口儀十郎	出来大工町	8円8銭4厘	4円37銭	
	松岡善吉	今下町	29円44銭4厘	7円38銭	
	御厨正次	浦五島町	35円40銭	5円49銭	
	白石甚太郎	本紺屋町	14円5銭4厘	5円60銭	
	志築長次	小川町	18円30銭2厘	3円36銭	
	東友太郎	本五島町	30円90銭	4円6銭	
廣田代四郎	浪ノ平町	11円14銭8厘	3円58銭	兼船具商 荒物屋、米穀 商・海産物商・ 貿易商	
大鶴利三郎	西浜町	18円75銭	6円43銭		

出典：『日本全国商工人名録』（1898年）（渋谷隆一編『明治期日本全国資産家・地主資料集成Ⅱ』P110、P112。1984年、柏書房）
○は、明治38年においても有力な小売業者であった者。

業者の名義の下に組合を組織し、長崎貿易商同業組合と称し、事務所を設置した。しかし、材木商は同業組合を組織していなかった。ただし、問屋と材木商とは共同で、官地約1万坪を借入れ、木材を貯蔵するための共同貯木場を稲佐弁天に設けていた²²⁾。蔵置料は、板類百間に付き1ヶ月50銭、筏のまま蔵置の場合、1坪に付き1ヶ月9銭であった。山積費は、1肩・25才に付き大物は2銭乃至2銭5厘、小物は1銭乃至2銭であり、板は1坪に付き百二十間程度積むこととされていた。なお、各木材業者は、各々納屋、蔵置所を所有して、貯木した。

22) 共同貯木場については、『木材商況』p13

4. 木材取引の形態と諸費用

長崎における木材の取引法についてみたい²³⁾。内地商間の取引については、問屋は荷主の木材を委託販売することが基本であった。状況によっては、問屋は荷主から仕切買をおこなった。まれに荷為替が発行されたが、他の地方同様、7掛または8掛とされた。売買は、材木船が入港すると船積のままこれを実見しておこなった。代金の授受については、委託販売の場合、問屋がその代金から、上荷賃・船賃・仲仕賃等の口銭諸掛を引き去り、残額を荷主に支払った。問屋が仕切買をおこなった場合は、問屋から即時に現金が支払われた。なお問屋口銭は、売上代金の5分であった。

居留清商との取引については、清商が買いまわる場合と、問屋が売込む場合とがあった。いずれの場合でも、物品を実見のうえ、価格を協定し、口約に止めた。手付金はなく、売買証書もほとんどなかった。場合によっては違約破談等もあったが、双方の示談によってこれをおさめた。万一解決しない場合には、同業者や他の貿易商の仲裁によって和解した。訴訟等はおこらなかった。代金授受については、現金支払が原則であったが、数日猶予されることもあった。

次に、輸送費等も含めて、木材取引の費用についてみたい。秋田（土崎・能代）よりの船賃は、4分板100間につき10円乃至12円、角材100石につき汽船120円、和船110円であった。日向（飫肥・福島）よりの船賃は、杉8分板（正6分）100間につき7円、杉4分板100間につき4円50銭乃至5円、角材1肩につき16,17銭であった。油津よりの船賃は、角材1肩につき20銭乃至25銭であった。豊後材の積出地である筑後の若津からの船賃は、4分板100間につき2円50銭、6分板100間につき3円50銭、角材1肩につき6,7銭であり、これらは肥後八代からの場合であっても大差はなかった。石見強津よりの船賃は、1寸板（75枚）100間につき17,18円、4分板100間につき10円乃至15円であり、長門、須佐からの船賃と同様であった。隠岐（西郷・五家）よりの船賃は、4分板100間につき12,3円乃至17,8円、

23) 『木材商況』 pp277-278

角材1肩につき15銭乃至20銭であり、対馬の各港からの船賃と大差はなかった。平戸及五島各港からの船賃は、対馬からの半額であった。紀伊(新宮)よりの船賃は、角材1肩につき20銭乃至25銭であった。以上の船賃をみてわかるように、長崎までの距離と運賃との関係は遠方ほど高いといった単純なものではない。概して木材の大量輸出港からの船賃は、割安となっているとみられる²⁴⁾。

水揚賃等については²⁵⁾、板100間につき水揚賃は1円60銭であり、浜より貯木場まで引取賃は杉板100間につき約1円、松板100間につき約1円50銭であった。角材を材木船より陸揚するさいには²⁶⁾、船員が角材を海中に投込み、これを筏にして曳航したが、その費用は100尺につき2円余(仲仕賃1人1日につき70銭)であり、筏を陸積する費用は100肩につき2円(尺メ当8銭)要した。これらの費用は木材の買手が負担した。この他に、通常は不要であったが、場合により倉敷料・地代として²⁷⁾、1坪につき1ヶ月55銭が請求されることもあった。

こうした木材を輸出する場合について、上海まで輸送する場合をみよう²⁸⁾。輸出は通常汽船でおこなわれたが、その船賃は、1寸板1000枚(50枝1トンとする)は50円、6分板1000枚(100束)は16円、4半板1000枚(100束)は13円、角材1トンにつき3円37銭5厘であった。また、積込費として、1寸板80間(500枚)、6分板80束、4半板200束につき、それぞれ賃2円50銭と積入1円26銭が必要であり、角材2トンにつき、船賃15銭と積入13銭を要した。荷造費として、6分板、4半板ともに1束(10枚)につき、藁代8厘と括賃1銭が必要であった。1寸板と角材については、荷造費は不要であった。

24) 船賃については、『木材商況』pp129-131

25) 『木材商況』p131

26) 『木材商況』p277

27) 『木材商況』p278

28) 『木材商況』pp128-129

5. 製品市場と造材法

長崎における木材造材法については、製品市場の要求を満たす目的で、様々な工夫がなされていた。板を清国へ輸出する場合²⁹⁾、長さ7尺5寸が主であり、6尺5寸も存するという状況であった。これは、長崎特有のものともてよい。清国では8尺が単位であり、長い木材を好んでいたことに対応したものである。なお、厚さ1寸と称している材は、多くは9分に墨掛、挽上げたもので、正8分にすぎなかった。

船用材については³⁰⁾、日向杉1本のうち本材を和船材として用い、末材を板材として用いた。天然素材である木材を、無駄なく木取りしたものとみられる。日向杉は、材質強靱であり、保存（対応）期間が長期であったため船材に適していたが、日向杉で外部を梱包する用途にも重用された。こうした用途に効率的に応えようとしたものとみられる。特に飢肥杉材は、水の浸透がなかった。肥後杉は水が浸透しやすく、秋田杉材は数ヶ月で腐朽の兆候があらわれた。

荷造については³¹⁾、内地輸送の場合と、輸出の場合とで、異なる取扱いがなされた。内地輸送の場合、4分板、6分板については、4枚から10枚を1束として、2箇所または中央1箇所を結束した。1寸板、その他については、結束されなかった。これに対して輸出の場合、4半板・5分板、6分板については、10枚を1束として3箇所が括られた。輸出の際、厳重に結束された様子が見えがえる。

結論

以上、日露戦争と長崎における木材業の動向について、同時代の史料にもとづいてあきらかにした。ここでは、考察をおこない結論としたい。元来、長崎では、居留する清商が上海を中心とした地域に、木材を輸出して

29) 『木材商況』 p383

30) 『木材商況』 pp383-384

31) 『木材商況』 p384

いた。これにくわえて、日露戦争を機に、中国北部や韓国への木材輸出が増加した。上海方面への輸出は、木材価格の高騰により減少傾向にあったとされるが、それでも明治38年、源泰は、70,920円の輸出をおこなっている。すなわち輸出のうち、4割程度は、上海方面へとおこなわれた。これは大阪や関門地域と比べた場合、長崎の大きな特色である。そして表10にみるように、長崎の木材業は輸出の割合がきわめて高かった。これは既存の上海貿易に、新しい満韓地域への輸出を上積できたことによるとみられる。

長崎は、木材は主として輸移入により調達した。産地は西日本の日本海沿岸諸地域、九州、秋田などが中心であった。一般的に製品の特徴は、板の入荷が多いことである。長崎の木材業は、製材業を他の地域に委ねたものであったとみられる。また輸出向けの板については、山陰地域が主産地であった。山陰地域の木材業者は、長崎を、輸出港として利用したとみられる。他方で、造船用の木材については、適材の外国からの輸入をおこない、また日向杉を入荷して調達した。日向杉は材質強靱であり、長期に風化に対応した。長崎の木材業者は、こうした材種の特徴を十分理解して商売したとみられる。加工についても、日向杉1本を、本材は和船材として、末材は板材として無駄なく木取りした。長崎の木材業は、中継港としての性格と、原料材生産地としての性格を、ともに有していたといえよう。

長崎の木材業者もまた、分業により成り立っていた。問屋は、貿易商の兼業であり、彼らは取扱産地、材種を限っていた。満韓方面への輸出も、こうした分業のなかでおこなわれたとみられる。上海方面への輸出は、清商がおこなった。このように外国輸出は、当該地域に情報を有する特定の商人がおこなったとみてよい。彼らはまた、資金力をも有していたとみら

表10 長崎、大阪、東京の木材輸出・輸入・移入(単位円)

	輸出	輸入	移入(国内産)
長崎	191,336	175,218	300,000
大阪	631,590	129,555	5,000,000 } 7,000,000
東京	1,020,000	7,806,741	

れる。そして、貿易一般の一部として、木材が位置づけられていた。小売業者は、木材専門家であり、地元の木材需要に対応して、生産と市場をむすびつけていた。問屋に対する相対的に強い交渉力は、中継貿易ではなく最終市場に直接かかわっていたことに起因するのではないか。市場の声には、問屋といえども、服さざるを得なかったのではないか。